

令和 6 年度院内感染対策講習会を受講して

栗本 真起子¹⁾

1) 岡山協立病院

昨年 Web 開催された、院内感染対策に関して地域で指導的立場を担う事が期待される病院等の従事者を対象とした厚生労働省主催の院内感染対策講習会に参加させていただきました。

受講対象者は医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師の 4 職種を対象としており、それぞれの分野からの講義内容となっていました。

麻疹等の感染対策とワクチンプログラム、院内感染関連微生物とその検査法や疫学、アウトブレイク対応の実践と予防、院内感染対策における他医療機関や行政等との連携、院内感染法令、薬剤耐性 (AMR) 対策アクションプラン等多岐にわたる内容でした。

千葉大学医学部附属病院 千葉均先生の講義は薬剤耐性菌によるアウトブレイク対応に関する内容でした。迅速にアウトブレイクを判断するためには、日頃から自施設の薬剤耐性菌や感染症の発生状況を把握しておくこと、また、JANIS や J-SIPHE など全国的なサーベイランスシステムを活用し、自施設の耐性菌の検出状況を全国データと比較・検証することの大切さを感じました。CRE や VRE など特異な薬剤耐性菌については 1 例の保菌であっても、早期終息にはスクリーニング検査や感染対策の強化が必要です。細菌検査室の日常業務の中で、薬剤耐性菌検出などの異常をいち早く察知し、ICT メンバーと共有していきたいと思います。

岐阜大学医学部付属病院 馬場尚志先生の講義は院内感染対策における他医療施設や行政との連携に関する内容でした。感染対策向上加算等により連携する複数の医療機関による合同カンファレンスが行われていますが、平時から各医療機関の状況を把握し課題を共有するなど、良好なコミュニケーションを構築しておくことが、緊急時の対応において重要であるとおっしゃっていました。COVID-19 パンデミックを経験し、行政を含めた地域全体での連携の必要性が再認識されています。

三重大学医学部付属病院 田辺正樹先生の講義は AMR 対策アクションプランに関する内容で

した。増え続ける薬剤耐性菌は国際的に問題となっており、人と動物、それを取り巻く環境は、相互につながっていると包括的に捉え、分野横断的に活動していくワンヘルスアプローチを基に、日本では 2016 年に AMR 対策アクションプラン 2016-2020 が策定され、アクションプランで掲げられた戦略に基づき様々な対策が行われてきました。

AMR 対策アクションプランには微生物の薬剤耐性率や抗微生物薬の使用量について成果目標が設定されており、2016-2020 では残念ながら多くの項目が未達成でした。現在 2016-2020 を踏襲した形で、2023-2027 が始まっており、成果目標は一部変更がありますが、引き続き減少に向けて取り組んでいくことになっています。今後、全国各地において地域ネットワークを活用しながら、J-SIPHE を用いたデータ収集や集団発生時の対応支援、抗微生物薬の適正使用が進められていくことが期待されています。ここでも一医療施設だけでなく、地域医療として取り組んでいく必要があるとおっしゃっていました。

講習会を通して何度も出てきた「平時に行っていないことは有事にできない」という言葉が印象に残りました。院内感染対策は、日頃からのマニュアル整備や ICT ラウンド、職員教育を行い、一部の職員だけでなく医療機関全体として情報を共有し、対策に取り組むことが重要です。また、感染対策は院内だけでなく地域医療として取り組んでいく必要があると学びました。

今回学んだことを生かして、ICT の一員として院内感染対策に努めていきたいと思います。

栗本 真起子

岡山協立病院 臨床検査科

岡山市中区赤坂本町 8-10

kurimoto@okayama-health.coop